

女性雑誌『ナチ女性展望』が伝えるヒトラー像

桑 原 ヒサ子

はじめに

第二次世界大戦に敗北したドイツは、アメリカ、イギリス、フランスそしてソビエト連邦の四か国に分割占領され、1949年にソ連占領地区からドイツ民主共和国（旧東ドイツ）が、アメリカ、イギリスそしてフランスの占領地区からドイツ連邦共和国（旧西ドイツ）がそれぞれ誕生し、2つの国家に分断された。

東ドイツは共産主義国家になったことで、ナチズムを克服したという理解に立った一方、西ドイツでは、甚大な戦争被害とホロコーストを引き起こしたナチズムの過去を反省し克服する歴史教育が徹底して行われた。そうした教育から浮かび上がるヒトラー像は、「独裁者」、「狂人」、「誇大妄想狂」など、ヒトラーの生前に連合国側が喧伝したイメージであった。

こうした負のイメージにもかかわらず、今日に至るまで虚構作品の世界でヒトラーほど好んで取り上げられる歴史上の人物はいないという。アルヴィン・H・ローゼンフェルドはその著書の中で、欧米人がヒトラーを悪の権化と見る一方で、ドキュメント・フィルムに映っている歓呼の声をあげ、手を振り、総統を崇拝するドイツ国民の姿のうちに自分自身を再認せざるを得ぬ割り切れなさを感じるからだと分析する。⁽¹⁾ヒトラーは弾圧だけでなく、国民を指導した政治家でもあった。ナチズムがヒトラー崇拝のために作り出したイメージは、「解放者」、「救世主」、「天才的政治家」であり、対極にあるヒトラーのイメージは、いずれにせよ両者とも、ひとを引きつけるに十分に「超人的」といえる。

ヒトラー崇拝を特徴づけるさまざまな言葉は、1933年1月30日にヒトラー内閣の成立後間もなくして新設された国民啓蒙・宣伝省の大臣に就任するヨーゼフ・ゲッベルスの日記を紐解くと出会える。ヒトラーと知り合ったことを記す初期の日記の中に、ヒトラーについて次のような印象が残っている。「この人間は何者だ？人か神か！キリストかヨハネか？」（1925年10月14日）⁽²⁾、「あの人は王になるにふさわしい。生まれながらの指導者。未来の独裁者。」（1925年11月6日）⁽³⁾、「彼の偉大さに、かれの政治的天才にぼくは頭をさげる。」（1926年4月13日）⁽⁴⁾、『「ヒトラーがわれわれを導いて現在の苦難から脱出させてくれる日はかならずくる！』… この人をわれわれにつかわされた神のところに感謝する！」（1926年7月6日）⁽⁵⁾

ゲッベルスは、ラジオ、映画、新聞、ポスターなどのメディアを駆使して、国民が忠誠

を誓い、犠牲的精神を自発的に発揮したくなるようなヒトラー崇拜のイメージを作り出していった。当時発行部数第一位であった官製女性雑誌『ナチ女性展望』*NS Frauen Werte*（1932年7月1日号～1944/45年号⁽⁶⁾）も同様に、再興した強力なドイツ、一丸となった民族共同体、強固な銃後をアピールするためにヒトラー像を効果的に利用した。本論では、『ナチ女性展望』を分析対象に限定して、どのようなヒトラー像が女性大衆に伝えられたのか考察を加える。

分析対象となる『ナチ女性展望』について簡単にまとめてみよう。この雑誌は、ナチ女性のエリート集団であるナチ女性団の機関誌として創刊され、1934年1月1日号から「党公認の唯一の女性雑誌」と位置づけられた。それは、ナチ女性団会長職をめぐる権力争いが収まり、2月にゲルトルート・ショルツ＝クリンクがナチ女性団会長に就任し、11月には全国女性指導者として、ナチ女性団とドイツ女性事業団を始め、すべての女性組織の頂点に立つ時期と重なっている。ショルツ＝クリンクにとっての課題は、強制的同質化によってさまざまな非ナチ女性組織を統合したドイツ女性事業団をどうナチ体制に取り込んでいくかであった。いざ有事となった場合に、銃後が堅固であることは、第一次世界大戦の苦い体験から焦眉の急であったからだ。

発行所は全国女性指導部の「報道とプロパガンダ部局」だったが、この部局は女性カメラマンや映画制作者を雇用し、日刊新聞の編集者たちと連携しながら『ナチ女性展望』のほか何種類かの女性雑誌を発行し、女性問題をテーマとする自主制作映画の上映会、展覧会を開催した。なかでも女性雑誌市場で第1位の発行部数（1939年時点で140万部、女性雑誌市場の4割近くを占めていた。第2位の『主婦の雑誌』は57万5千部だった⁽⁷⁾）を誇る『ナチ女性展望』は、読者であった中産階級の女性たちを啓蒙する最も重要なメディアの一つであった。

なお、号数表示、発行頻度、頁数について簡単に説明しておきたい。創刊号が発刊された1932年7月から翌年6月までの1年間を「初年度」と呼んでおり、したがって、廃刊になった1944/45年号は「第13年度」になる。空爆の影響で第11年度から第12年度にかけて発行ペースが乱れる時期を除いて、各年度1号は7月号となる。発行頻度については、第10年度16号（1942年3月）から「3週間に1冊」、第11年度15号（1943年5月）から「月1冊」になるまでは、月2冊のペースで刊行された。頁数は、28頁で創刊され、第2年度5号（1933年9月1日）で32頁に増えた。戦時統制措置で第8年度6号（1939年9月第2号）から28頁に減少。翌10月第2号で20頁に自粛したが、第12年度2号（1943年10月）からは20頁と16頁の号が交互し、第12年度12号（1944年8月）で12頁となった。⁽⁸⁾

1. 『ナチ女性展望』におけるヒトラー像の構成手段とその分布の特徴

ヒトラー像を作り上げるのに、利用されているのは「写真」、ヒトラーについての「記事」(詩を含む)、「ヒトラーの言葉の引用」の三つである。

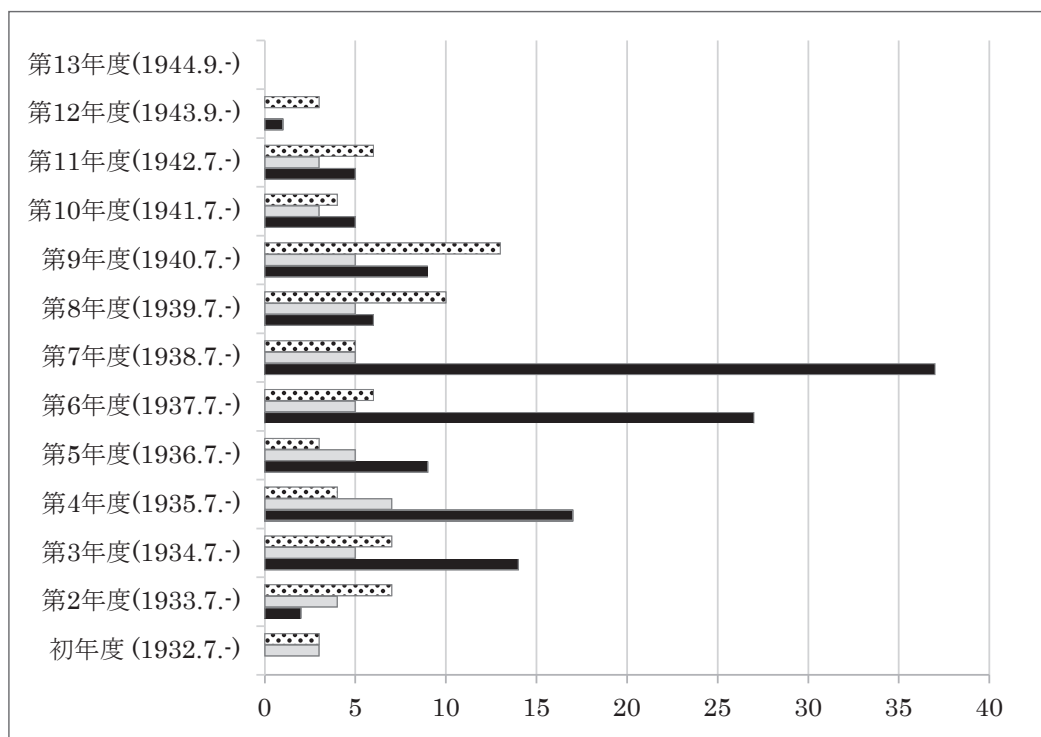
(1) 写真、記事、言葉の分布

『ナチ女性展望』はグラビアと活版がほぼ半々であったので、写真がもともと多かったが、視覚的に訴えられる写真は中でもヒトラーのイメージを作るにも最も効果のある手段であった。ヒトラーの写真は全部で135枚使われている。年度ごとの使用枚数を図1で見ると、第7年度(37枚)と第6年度(27枚)が飛び抜けて多く、次が第4年度(17枚)と第3年度(14枚)が目立っている。逆に、スターリングラードでの大敗後に戦況が悪化する第12年度は1枚、第13年度はヒトラーの写真はない。同様に初年度にも写真の掲載はなかった。

ヒトラーに関する記事は全部で52件ある。第12年度と第13年度に掲載がないのは写真の場合と同様の理由による。多いのは第4年度の7件ではあるが、最も少ない3件は年度

図1

■ 写真、■ 記事、□ 言葉



として3回、5件が年度として5回あり、記事に関しては、年度ごとの大きな差は見られない。

ヒトラーの言葉は全部で71回を数える。第9年度（13回）と第8年度（10回）に頻出しているが、それを除けば、第13年度を別として、3回から7回までで、こちらも年度ごとの差はないと言えるだろう。

三つのジャンルを合計してみると、件数が多い順に第1位は第6年度（39件）から第7年度（47件）にかけて、第2位は第3年度（26件）から第4年度（28件）、そして第3位が第8年度（21件）から第9年度（27件）となり、ヒトラーのイメージ作りに積極な時期であることが分かる。第1位と第2位は、写真の枚数に影響されており、第3位はヒトラー自身の言葉の利用度の高さによる。

(2) ジャンルの特徴

『ナチ女性展望』が伝えるヒトラー像の種類については後述するが、ここでジャンルごとの特徴について説明しておこう。

さまざまなヒトラー像は「写真」の中に見て取れる。その中でも際だって多いのは「総統」のイメージ（52.6%）と「国民に愛され慕われる総統」のイメージ（27.4%）である。両者を合わせると80%に達する。その他には、「芸術・文化の擁護者」や「女性（活動）への理解者」のイメージ、「素顔の総統」のイメージがある。

記事に関しても、ほぼ全てが「総統」と「国民に愛され慕われる総統」の2つのイメージに集約されている。ただし、割合は前者が33.3%、後者が58.8%となっている。「総統」のイメージを作る記事は、ドイツの崩壊を克服するために歴史に登場した人、新国家の建設者、天才的演説家、兵士の特性と政治家の才能が一体となった総統など識者による崇拝すべきヒトラー像を作る記事や、なぜ総統を崇拝するのかを読者の体験談で伝えるものから総統の誕生日に国内外からカードやプレゼントが山のように届いてSS隊員が困っているというソフトな記事、開戦後は、前線と一体になる銃後の決意や忠誠を誓うファナティックな記事まで、国民の側から総統を敬愛し信じる決意の記事から構成されている。

一方、ヒトラーの言葉について特徴的な点は、写真や記事のようにヒトラーを客体として扱っておらず、直接その言葉を引用していることである。身近にヒトラーを見たり聞いたりできなかった読者にとっては、写真と合わせて、総統の言葉は、文字通りその「声」を聞くのに等しい効果があったろう。しかし、だからといって、言葉をすべて「総統」のイメージに分類するのは大雑把過ぎるであろう。

『ナチ女性展望』の内容構成を見ると、巻頭には各号特集記事が割り当てられた。戦没将兵慰霊の日、復活祭、ヒトラーの誕生日、母の日、「ドイツ芸術の家」における大ドイツ美術展、党大会、収穫祭、クリスマスなど暦上固定されている行事のほか、時事問題やイ

デオロギー的テーマが特集内容となった。そうした特集には、内容に対応するヒトラーの言葉が引用された。こうした理由から、ヒトラーの言葉は、概ね毎年度一定の数が掲載されることになった。

そのほか、『ナチ女性展望』はナチ女性団とドイツ女性事業団の活動報告の場でもあったので、例えばナチ国民福祉団と連携したドイツ女性事業団の重要な活動の一つである冬期救援事業や開戦後のドイツ赤十字のための戦時救援事業を呼びかける記事などにも、まず総統の言葉が掲げられた。総統の言葉は、ナチ女性団とドイツ女性事業団の活動に権威を与える意味をもった。総統の呼びかけである、総統の考えであるという理解が、読者の中に生まれる仕組みになっていた。

したがって、ヒトラーの言葉の内容は多岐にわたる。民族共同体のために協働すること、芸術文化の高揚、女性の使命としての母、青少年教育などである。開戦後は同じ内容でも戦時色が濃厚になる。女性の使命としての母は、できるだけ沢山の兵士を産むことを意味するようになり、民族共同体のために協働することも、女性の戦時活動への呼びかけに変わっていく。図1で確認したように、ヒトラーの言葉に関しては、第8年度と第9年度に頻出していた。この期間は、第二次世界大戦直前から独ソ戦開戦までの時期にあたる。ようやく豊かな生活を送れるようになった国民に対し戦争の遂行に賛同してもらわなくてはならなかった。この時期の言葉には、「意志の力」や「犠牲的行為」といった表現が多用され、戦争の大義と楽観的見通しが強調され、女性に向かっては銃後の守り（軍需工場への動員、出産と子どもの戦時教育）を求め、その一方で女性の戦時活動を称える内容が多かった。

とはいえ、ヒトラーの言葉も整理すれば、最多はやはり「国民の指導者」を表現する内容の言葉であった（39%）。

(3) イメージ作りに積極的な年度と時事的出来事との関係

第8年度と第9年度にヒトラーの言葉が他年度より頻繁に掲載された理由は、今述べた通りだが、それでは、写真の掲載回数が第3年度（1934年7月～1935年6月）＋第4年度（1935年7月～1936年6月）で多くなり、第6年度（1937年7月～1938年6月）＋第7年度（1938年7月～1939年6月）でさらに増加する背景には何があったのだろうか。

まず、第3年度と第4年度に起こった主な出来事を振り返ってみよう。

1934年8月2日、ヒンデنبルク大統領は在位のまま死去する。ただちに大統領としての権能は「総統兼首相」であるヒトラーに移され、8月19日に実施された国民投票では、有効投票数の89.93%が賛成の意志表示をした。その半年後の1935年1月13日、ヴェルサイユ条約に基づき1920年から1935年の15年間にわたり国際連盟の管理地域となっていたザール地方がその期限を迎え、今後の帰属を決める国民投票が行われた。結果は、ドイ

ツ帰属が90.73%（フランス帰属0.4%、現状維持8.86%）に達し、国連理事会の承認を得て、ザール地方は3月1日、ドイツに復帰する。（図2）同月、ヒトラーは一般兵役義務を導入するが、これはヴェルサイユ条約違反だった。

そして、翌年の1936年3月7日、ヒトラーはロカルノ条約を破棄して、軍を非武装地帯のラインラントに進駐させた。国際連盟はこの駐留をヴェルサイユ条約およびロカルノ条約に対する違反であると断じたが、ドイツの国民投票では99%がヒトラーの決断を支持した。

ヒトラーはその活動の当初から主要な外交政策をいくつか挙げていたが、その一つはヴェルサイユ条約からの脱却であった。実際に進められたヴェルサイユ条約の切り崩しは、国民投票の結果に見られるように、戦前のドイツの地位への復帰を望む国民感情と一致していた。それゆえ、この時期に国民と総統の一体感は目に見える形で示され、英断を下し行動を起こす総統に対する評価は高まった。

第6年度から第7年度にかけて、ヒトラーに対する評価はさらに増大する。

ヴェルサイユ条約からの脱却と並ぶヒトラーの次の外交政策の柱は、大ドイツ帝国の建設と、ドイツ民族の生存権確保のための東方侵出であった。第二次世界大戦勃発直前までの『ナチ女性展望』の2つの年度で起こった出来事をまとめてみよう。

1938年3月12日、ヒトラーはドイツ軍をオーストリアに進駐させ、翌日オーストリアはドイツに合併された。この措置も4月10日の国民投票で、ドイツとオーストリア両地域で99%の支持を得る。第一次世界大戦後、ドイツは国土の一部を失い、一方、小国になったオーストリアはドイツとの合併を希望していたが、それはヴェルサイユ条約により阻まれていたので、悲願を達成した形となった。

さらにヒトラーは、300万人（人口の28%）のドイツ系住民が住む、ドイツ国境にあるチェコスロバキアのズデーテン地方のドイツへの帰属を要求した。少数民族としてチェコスロバキアから差別的待遇を受けていると不満を募らせていたからである。1938年9月29日に英仏独伊の4か国首脳が集まったミュンヘン会談で、戦争を回避させるために、ズデーテン地方はドイツへ割譲された。（図3）こうして、ドイツは政策通り大ドイツ帝国を作り上げた。

しかし、その半年後の1939年3月14日から15日にはチェコスロバキアに進軍し、スロ

図2 「総統、心配しないで下さい！ザールの私たちは、この件をちゃんとやり遂げます。」
第3年度14号（1934年12月第3号）



図3 「ミュンヘン協定の署名後、総統の家で」
記事「自由と平和をめぐる」に添えられた写真の1枚
第7年度9号（1938年10月第3号）
左からチェンバレン、ダラディエ、ヒトラー、ムッソ
リーニ、チャーノ伊外相



ロヴァキアを独立させて従属国にし、チェコをベーメン・メーレン保護領とした。さらに、軍を進駐させて、リトアニアからメーメル地方を返還させている。こうして、ポーランドをめぐむ情勢は緊張を高めていくことになる。

オーストリア併合が国民から歓迎されたことは、国民投票の結果から分かる。ズデーテン地方やメーメル地方の帰属も「解放」と理解された。この時期、ヒトラー賛美が頂点に達するのは、しかし、こうした外交的成長によるだけでなく、

経済状況の改善が果たした役割も大きい。ドイツ国民はようやく、生活の豊かさを享受できるようになっていたからである。

ヒトラーが首相に就任した時期には、第一次世界大戦後の賠償金問題、それに続く世界恐慌のあおりを受けて、600万人もの失業者がいた。経済政策が功を奏して、その数は1936年1月には250万人に減少する。全国女性指導者のシュルツ＝クリンクは、1936年初頭の演説の中で、未だ失業者はいるものの国民が自信を取り戻せたことに対する総統への感謝を述べている（第4年度16号「ドイツ人であることは、強靱であること」）。1938年1月の失業者数は100万人、1939年には30万2000人まで減少する。1938年には、ドイツ人の2人に1人が預金通帳を持てるようになった。家庭内にも豊かさが浸透して、掃除機、冷蔵庫、ガス瞬間給湯器も登場するようになった。⁽⁹⁾失業者数が最悪であった1932年の国会選挙で経済の改善を選挙公約に掲げ、ナチ党を第1党に押し上げたヒトラーは、実際それをわずか数年で実現したのである。

(4) ヒトラーに関する記事、写真等の掲載パターン

ヒトラーの言葉が定期的な特集記事の巻頭を飾り—なかでも「母の日」特集号には必ず総統メッセージが付いた—、読者の啓蒙や協働を促す記事のリード文として使われたように、ヒトラーについての記事や写真にも一定の掲載パターンがあった。

①総統の誕生日

アドルフ・ヒトラーは1889年4月20日に生まれた。したがって、毎年度4月号は誕生日特集となるが、初年度（21号、1933年5月1日）には一切言及はない。第2年度（21号、1934年4月第2号）も「総統の誕生日にドイツ女性の感謝と賞賛を」と題した詩が一篇掲載されているだけである。なぜだろうか。

組閣したとはいえ、国会議事堂放火事件が起こり、3月には総選挙があった。その後、全権委任法を通過させ、1党独裁を達成し強制的同質化を軌道に乗せたものの、国防軍、経済界、官僚といった伝統的支配層と手を結ぶために、レーム以下、突撃隊員85名を粛清し（1934年6月30日）、さらには党内でヒトラーと覇を競ったグレゴール・シュトラッサーや前首相シュライヒャーなど有力者をも殺害する。これにより、ヒトラーは指導力を増し、政権を安定させることに成功する。そして、1934年8月、ヒンデンプルク大統領が死去すると、ヒトラーは大統領も兼任する「総統兼首相」に就任する。これで、ヒトラーは完全に権力を握ったことになる。そう考えれば、首相就任からの1年半あまりの期間は、闘争期の延長ともいえる政情不安定な時期だったのである。

第3年度21号（1935年4月号）でようやく「私たちは総統を歓迎する」という記事に、国民に慕われる総統をイメージさせる5枚の写真が登場する。ザール地方がドイツに復帰した直後の号だった。第4年度22号（1936年4月）になると「祝」のキャプションが付いた写真が「私たちの総統へ」の記事に5枚添えられている。すでにヒトラーは大統領職を兼務し、この号はラインラント進駐直後の号だった。

初期の総統の誕生日に対する『ナチ女性展望』の素っ気なさは、政情不安定だけが理由ではなかった。さまざまなナチ女性組織が統合されてナチ女性団が設立された1931年からショルツ＝クリンクがヒトラーから全国女性指導者の肩書きを許される1934年11月までは、ヒトラーの側近を巻き込んだナチ女性団会長職をめぐる権力闘争があり、それを収めるために1933年10月にナチ女性団会長としてナチ女性団に送り込まれてきたのは男性のクルマッハーだった。彼はショルツ＝クリンクの前任者にあたる。この時、ナチ女性団は、ナチ指導部が自分たち女性組織を解体するのではないかと危惧したのだった。

選挙運動ではヒトラーを首相にすべく最大限の活動を展開したナチ女性たちは、権力掌握後に実施された反動的政策、すなわち上級管理職からの女性の締め出し、州やその他の自治体からの女性官吏の解雇、女性教師削減、女子大学生の入学制限、男性失業者を助けるために女性を結果として退職させることにつながる「失業減少法」の中の「結婚資金貸付制度」⁽¹⁰⁾など女性差別的政策に当惑を隠し切れなかったからである。「新国家が女性を必要としないと分かっていたら、ヒトラーのために運動することなど絶対になかったでしょう」⁽¹¹⁾という声も女性指導者たちの中から上がった。『ナチ女性展望』第4年度23号（1936年5月第1号）の記事「救援事業『母と子』の2年」にも、闘争期から政権掌握直後までのナチ党の女性抑圧スローガンと行動に驚きを感じたと回顧が載っている。もちろん官製雑誌に堂々とそうした意見の掲載が許されたことは、すでにナチ指導部の中で女性政策が大きく転換されたことの証左である。民族共同体結束のためにはナチ女性団とドイツ女性事業団の活動に期待がかけられるようになっていた。⁽¹²⁾それは、ショルツ＝クリンクの全

図4 「総統の50回目の誕生日に」

彫刻家ヒュルスによる総統胸像。

アンネリース・マンによるアグファ・カラー撮影。

第7年度21号（1939年4月第2号）

この年度から第12年度までの総統の誕生日特集の表紙で、第11年度を除くと、5枚のうち4枚までが、総統を題材にした彫刻や絵画など芸術作品の写真である。なお、『ナチ女性展望』に掲載された総統の写真全体では芸術作品としての総統の写真は14.8%を占める。



国女性指導者就任以降と考えていいだろう。それゆえ、第3年度21号（1935年4月号）でようやく「私たちは総統を歓迎する」という記事に、国民に慕われる総統をイメージさせる5枚の写真が登場するのである。

特集号らしくなるのは第6年度21号（1938年4月号）からである。表紙裏に大きな肖像写真が掲載され、「総統の生涯から」の記事に写真が3枚、オーストリア併合の記事に5枚の写真が添付されている。50歳の誕生日を迎えた1939年4月の第7年度からは表紙にもヒトラー像が掲げられるようになる。（図4）この年度は、記事「総統の歴史的偉業」に写真2枚、「メーメル地方は解放された！」に2枚、「なぜなら、あなたこそがドイツだからです！」に10枚もの写真が添えられ、全年度のなかで最もヒトラー像を印象付ける号となっている。

『ナチ女性展望』は、第3年度の総統の誕生日特集（1935年4月号）以降、主にこの特集号を利用して、ヒトラーと国民のパーソナルな一体感を強調するために、「国民から愛され慕われる総統」というイメージを演出する写真や記事を掲出している。このイメージ作りの共演者は、ヒットラー体制への取り込みが課題であった労働者、そして女性と子どもであった。

権力掌握後、ジャーナリズムに対する統制と弾圧は強化されたが、女性雑誌に関する限り、ナチ当局は編集方針に介入しなかった。20年代～30年代の基調が続いており、家庭生活や職業生活で女性解放論が女性雑誌のテーマに取り上げられることはなく、政治上の問題にならなかったからである。『ナチ女性展望』の編集部も当然のことながら、自由に雑誌の発刊ができた。しかし、1939年の開戦と同時に宣伝省に「雑誌ニュース部」とそれを補完する「週刊ニュース部」が創設されると、女性雑誌の編集内容も細部にわたって統制を受けるようになる。そのため、開戦後の総統の誕生日特集号にあたる第8年度からは、趣ががらりと変わり、「最高司令官としての総統」像が前面に出ている。総統と一緒に

に撮影されるのも、女性や子どもではなく、兵士たちに代わる。

表紙にヒトラー像が掲げられるのは、第7年度の誕生日特集号（1939年4月第2号）からだ。第11年度（1943年4月）の表紙は、軍需工場で必死に戦時活動に励む女性の写真となっており、ヒトラーの写真は表紙裏に移されている。1月31日のスターリングラードにおける第6軍の降伏は戦局を転換させ、2月18日にはゲッベルスが総力戦演説の中で国民に犠牲的精神を要求した時期であった。

②党大会

ナチ党の全国党大会は、1927年の第1回大会から、戦争のために最後となる1938年大会まで10回開かれたが、権力掌握以降の1933年の第5回大会からは毎年9月上旬に1週間程度の期間で、一貫してニュルンベルクで開催された。

『ナチ女性展望』の発行期間と重なる党大会は第5回大会（1933年8月30日～9月3日）からだ。初年度と第2年度には党大会の報告記事や写真は一切ない。誌上に取り上げられるのは第6回大会（1934年9月4日～10日）からである（第3年度7号、1934年9月第2号）。党大会期間中にナチ女性会議も開催され、女性会議に出席したヒトラーの演説後にナチ女性団の新会長ショルツ＝クリンクが演説デビューした大会だった。党指導部とナチ女性団との緊張関係が解消した党大会でもあった。

第6回大会はレニ・リーフェンシュタールが記念映画『意志の勝利』を制作したことで有名だが、党大会には毎年ほぼ50万人が参加する大集会であると同時に、この大会から夜間に130基の対空サーチライトを使ったライトアップをするなど、大規模な演出をして、ドイツ国民とナチ党の陶酔的一体感を作り出す一大プロパガンダとなった。党大会に参加できなかった人々のために、党大会の様子はラジオや映画によっても伝えられたように、『ナチ女性展望』も「写真で見る1934年の党大会」（第3年度7号、1934年9月第2号）のように多くの写真、総統の演説要旨、報告記事で臨場感が湧く構成にしている。そ

こから生まれるヒトラー像は「傑出した指導者」像である。

『ナチ女性展望』では、党大会の報告に続いて、党大会期間中に開催されるナチ女性会議の



図5

記事「ニュルンベルクにおける女性の信条告白」に添えられた写真
第6年度7号（1937年10月号）

報告も写真、ショルツ＝クリンクの演説全文ないし要約と報告記事という構成で詳しく伝えている。その際、特徴的な点は、演説するヒトラーとショルツ＝クリンクを同じようなアングルで撮影した写真が併載されていることである。この構図により、ショルツ＝クリンクに「偉大なる女性総統」のイメージが付与されるよう計算されていた。(図5)

③大ドイツ美術展

ヒトラーは画家を志望したものの、ウィーン美術アカデミーへの進学は叶わず、建築へ関心を持つも、建築家になることもできなかった。ワーグナーの音楽との関わりも取り上げられるヒトラーだが、『ナチ女性展望』には、民族のレベルの高さを表すのは文化の高さであるというヒトラーの発言がたびたび掲載されている。

ヒトラーがパウル・ルートヴィヒ・トローストとその妻ゲルディ・トローストに設計を依頼した「ドイツ芸術の家」は数年の歳月をかけて、1937年7月に竣工し、ドイツ民族の芸術の模範になるべき現代作品を展示する第1回「大ドイツ美術展」が開催された。石造りの古代ギリシャ風の外観をもつ「ドイツ芸術の家」は、国民社会主義政権の初めての象徴的建築であった。(図6)「大ドイツ美術展」は戦時中も中断されることなく、1944年まで毎年催された。

この特集は、「芸術・文化の擁護者」としてのイメージを定着させる役割を果たす一方、「大ドイツ美術展」の展示作品は当然のことながらヒトラーを「傑出した指導者」として描く作品が多かった。それゆえ、総統のイメージを伝える彫刻、絵画、デッサン、版画写真がしばしば『ナチ女性展望』の中で使用された。また、国民社会主義イデオロギーを題材にした「ドイツ芸術の家」の展示作品は、頻繁に誌上の啓蒙的記事に視覚補助手段とし



図6 「総統はトロースト夫人を歓迎する」「総統による厳かな落成式の日を迎えた『ドイツ芸術の家』」
記事「祝祭の都市ミュンヘンはドイツ芸術の日をいかに体験したか」に添えられた写真
第6年度3号(1937年8月号)

パウル・ルートヴィヒ・トローストはこの日を体験することはできなかった。第1回大ドイツ美術展と併行して、国民社会主義イデオロギーに合わない芸術を示すために、「退廃芸術展」も開かれた。

て添えられた。こうした方法は、同時に、展覧会へ出かけられない読者にも芸術を身近に感じられるようにする工夫でもあり、クリスマスや特別な機会のプレゼントとして、また芸術家への支援につながるよう、作品の誌上販売も企画された。

④時事的出来事

大ドイツ帝国建設を目指して起こる歴史的出来事に合わせて適宜組まれる特集の記事や写真は、「解放者・救世主としての総統」、「傑出した指導者」としての総統のイメージを定着させていった。

2. ヒトラー像

初年度に掲載されたわずかな数の記事や言葉は、1932年11月6日および1933年3月5日に行われる国会選挙の選挙運動に関するものだった。

8号（1932年10月15日）にはミュンヘンのナチ女性団会議で女性党員に向かって演説したヒトラーの言葉が掲載されている。ヴァイマル共和国批判、国家の基盤となる家族の重要性、政治活動の立脚点としての国民、労働者をも民族共同体に迎え入れ、現在の苦難と困窮からの解放を訴えている。たたみかけるように次号では女性記者が「ドイツ人女性はアドルフ・ヒトラーを支持します！」と題して、前号でのヒトラーの訴えを分かり易く繰り返している。両号とも記事の最後に「ドイツ人女性はみな迷うことなく11月6日にリスト1を選ぶ」⁽¹³⁾というスローガンが掲げられている。

1932年11月の選挙は、ナチ党が第一党に躍り出た7月の選挙より得票数は減らしたものの、第一党の地位は維持した。紆余曲折の末、翌年1月30日に首相に就任したヒトラー（図7）は、2日後、議会を解散した。国会選挙投票日は3月5日だった。



図7 「ドイツ国民の首相」
初年度16号（1933年2月15日）

17号（1933年3月1日）では、間もなく『ナチ女性展望』の編集副責任者となるヒルデガルト・パッソウが記事「新しい国家の建築者アドルフ・ヒトラー」の中で、上から国家建設を行って失敗したビスマルクと比較して、基礎から国家を形作ろうとしているヒトラーの方が勝っていると熱弁を振るっている。3月の国会選挙を視野に入れたこの記事同様、同号には「アドルフ・ヒトラーがドイツ・ラジオ放送で演説する」が掲載された。2月10日にベルリン、スポーツ宮殿でヒトラーが行った選挙演説はラジオ放送され大反響を生み出すが、その時の演説の一部を載せたものである。

1929年にナチ党第3代宣伝全国指導者となったゲッベル

スは、1930年9月14日の国会選挙から宣伝戦略全般を指揮し、1933年3月には新設された宣伝省大臣に就任したが、彼はその後も大衆宣伝に力を注いだ。2月10日のヒトラーの演説とラジオ放送について、ゲッベルスは次の様な印象を記している。⁽¹⁴⁾

総統は熱狂的な喝采の嵐でむかえられる。総統はすばらしい演説をおこない、マルキシズムにたいする激しい闘争を宣言する。最後に彼は信じられないような感情のたかぶりを見せ、「アーメン」という言葉で演説を切る。これがきわめて自然に響き、聴いていた者はみな心の底から揺り動かされる。これまでのものとは比較にならぬほど自信と気魄にみち、新鮮で偉大な演説だった。

この演説は全国に感動の嵐をまきおこした。国民は戦わずしてぼくらのものとなるだろう。シュポルトパラスト（＝スポーツ宮殿。筆者註）の群衆は陶醉し、正気を失っている。

夜、各地に電話する。演説が放送の方でもおどろくほど効果をあげたことがわかる。ラウドスピーカーのもつ大衆宣伝力についてはいまのところだれもじゅうぶんに認識していない。とにかく、他党はこれを利用できなかった。

こうした熱狂ぶりは、しかし『ナチ女性展望』の紙面からは伝わって来ない。

ナチ女性たちは選挙運動期間、常に男性党員を支え続けてきた。彼女たちは大小さまざまな党旗や腕章を縫い、壁にポスターを貼り、身寄りのない失業中の突撃隊員の世話をし、街頭で寄付集めをした。地方でも全国レベルでも女性指導者が登場して、『わが闘争』や党のパンフレットを読み、討論会や集会が開かれた。選挙の勝利とヒトラーの首相就任は、彼女たちにとっても勝利になるはずであった。彼女たちは、党を支えてきた努力が報われ、国家の支援を受けて、自分たちが思い描いていた活動が可能になると期待していた。しかし、男性ばかりで構成されていたナチ党指導部の女性政策が彼女たちに大きな失望をもたらしたことは前章の「(4) ヒトラーに関する記事、写真等の掲載パターン、①総統の誕生日」で述べた。その緊張関係の解消には、まだ時間がかかったし、政権の安定にもさらに時間が必要であった。

第2年度からヒトラーの言葉の引用が増えるが、テーマは国民の育成、健康問題、殉死したナチ党員追悼、宗教とナチズム、芸術についてなど多岐にわたり、この年度も引き続き、鮮明なヒトラー像は浮かび上がって来ない。

大統領職の兼務が完全なる権力掌握のエポック・メイキングな出来事だとすれば、後世まで残るヒトラー像の誕生もこの時以降と言っていいただろう。ヒンデンブルク大統領死去にともなって、その権能をヒトラーに移すことの是非を問う1934年8月19日の国民投票

では90%の賛同を得るが、すでに政敵の存在しないこの時期、投票に備えてゲッベルスは大々的なヒトラー崇拜キャンペーンを張ったのである。その一方で、民族共同体を盤石にするには、女性組織との協働は欠かせないという現実的判断を下したナチ指導部は、ナチ女性団会長を男性から女性のショルツ＝クリンクに交代させ、迎えた1934年9月の党大会は和解の象徴となった。(図8) こうして、『ナチ女性展望』も第3年度から崇拝すべきヒトラー像を進んで伝えることになるが、まさに、ザール地方帰属に始まるその後の政治的・外交的動きが、ヒトラー像を信頼に足るイメージに高めていくのである。

すでに見てきたように、『ナチ女性展望』が伝えるヒトラー像を分類してみると、「総統」のイメージと「国民から愛され慕われる総統」のイメージがそのほとんどを占める。しかし「総統」のイメージも、さらにいくつかのタイプに分けることができる。第一次世界大戦後の困窮した生活からドイツ国民を助け出してくれた総統、そしてヴェルサイユ条約によって分断されたドイツ民族を救い大ドイツ帝国を建設した「解放者・救世主としての総統」像、そしてそれゆえの「傑出した指導者」像、さらに開戦後に頻出する「最高司令官としての総統」イメージが挙げられる。1938年2月、ヒトラーは直接国防軍を指揮すると宣言して、国防軍最高司令官の職務も引き受けた。

「総統」イメージに次いで多かったのは、「国民から愛され慕われる総統」のイメージだった。このイメージを通して、民族共同体の一体化を強調することができた。総統を愛し慕う国民の代表は、男性よりも子どもや女性の方が多用されることから、このイメージ作りは女性雑誌が得意とする領域だったといえよう。

「総統」イメージや「国民から愛され慕われる総統」イメージと較べると、量的にはかなり劣るものの、第3位に位置する「芸術・文化の擁護者」としてのイメージについても具体的に見てみたい。



図8 「写真で見る1934年の全国党大会」 第3年度7号(1934年9月第2号)

「総統は、女性会議に出席する1万人もの
女性団員の終わりのない喝采に迎えらるる」

「民族衣装のナチ女性団員に囲まれる総統」

(1) 解放者・救世主としての総統

ヒトラーを解放者になぞらえる記事は、第2年度8号（1933年10月15日）に登場する。そこでは、ゲルマン諸部族を率いて古代ローマ帝国軍を打ち破る「解放者ヘルマン」が引き合いに出されているが、それはナチズムが目指す国家の理想がゲルマン民族的国家であるという理念的説明に留まっている。実際にヒトラーに「解放者」のイメージが備わってくるのは、ザール地方の帰属以降、少数民族であるがゆえに抑圧されていたドイツ人居住地域のドイツへの復帰やヴェルサイユ条約に阻まれていたオーストリア併合などの歴史的出来事による。

この「解放者」イメージは数多くの写真によって形成されてゆく。写真の配置には決まったパターンがあり、喜びを表す「解放された者」と「解放者」である総統の写真が必ず対比的に配列された。(図9)そして、この写真構成には明らかにジェンダー的特徴が見られる。すなわち、解放された喜びを表現するのは常に女性の役割であって、不思議と被解放者を代表する男性の姿はない。ヒトラーや兵士たち解放者を男性が象徴する一方、苦難に耐え続け、無力ゆえに解放を待つしかない弱い存在を女性が象徴している。このジェンダー理解は、国家のために闘い、女性を守る男性というナチ・イデオロギーと重なっていたのである。

「解放者・救世主」のイメージは、ヴェルサイユ条約によってドイツ本国から切り離され、帰属を許されなかった地域のドイツ人の解放にのみ限定されるのではなく、そもそもは第一次世界大戦後の困窮生活と精神的屈辱の日々から、仕事を与え、豊かな生活を可能にし、ドイツ人としての誇りを取り戻してくれた総統を「解放者・救世主」として神格化



図9 記事「ズデーテン・ドイツ人の豊かさについて」
第7年度13号（1938年12月第2号）
左：解放されたズデーテン・ドイツ人は幸せにひたる
右：女性たちから花束を受ける車上のアドルフ・ヒトラー

することが、まず第一にある。

アンネマリー・ケッペンはその詩の中で、救世主になぞらえてヒトラーへの感謝と総統に付き従う決意を表現している。(第3年度7号、1934年9月第2号)

(…) / あなたはドイツのどの家にもやって来た。/ 友であり、救い主であり、静かな力。
私たちの竈の半分消えかかっていた火。/ それはあなたの信仰の炎によって新たに燃え上がる。/ (…)

私たちは何も分からず、よろよろ歩いていた。/ あなたは私たちのために大きな力で戦った。/ あなたは私たちに代わって、認識という苦悩を引き受けた。そして私たちのために一人で闇を歩いて行った。

しかし、あなたがこれまで私たちのために誠実に戦ってくれたのだから、今度は私たちが息をぴったり合わせて、あなたに従ってゆきます。/ あなたは、こんなにも長い間、私たちのために一人で苦しんできた。/ これまで大地を支えてきたとても強靱な心の持ち主であるあなた。

第二次世界大戦までのこうした「救世主」のイメージは、総統に対する国民からの感謝という形で表現される、第3年度以降増加する多数の写真に端的に現れている。これらの写真については、「国民から愛され慕われる総統」の項目で見よう。

一方、第10年度17号(1942年4月)の誕生日号の記事「1942年4月20日、総統への誓い」では、4月20日は神の摂理によりドイツ国民に救い主であるアドルフ・ヒトラーが遣わされた日であると述べ、総統の苦難の半生を振り返り、ドイツ人女性は、1933年以前の何年もの恐ろしい困窮の日々から自分の夫や息子を救い出してくれた人のことを決して忘れないと結んでいる。

戦時中に再び浮上してくる「救世主」のイメージは、「最高司令官としての総統」のイメージと不可分であるので、その項目でもう一度触れることにしたい。

(2) 傑出した指導者

このイメージを雄弁に伝えるのは党大会の写真である。(図10～12) 数十万の国民の犠牲的精神による大会実施への奉仕、そこから出来上がる秩序と規律ある大デモンストレーション。巨大空間に立つ総統は、全国民の支持と忠誠を勝ち得た指導者として表象される。

バルドゥール・フォン・シーラハは、その詩「偉大なること」(第3年度21号(1935年4月号)、第8年度20号(1940年4月第2号)に再掲)で、人間業を超越した指導者ヒトラーの天才を抑制された感動をもって描き出している。

「これが彼の本当に偉大な点である。すなわち彼が私たちの指導者であり、多くの者の

英雄であるだけでなく、彼自身が真っ直ぐで、揺るがず、質素であること。私たちの世界の根源が彼の中にあり、そして彼の魂は星々にまで届く、それでいて彼もあなたや私と同じ人間であるということ」

人間である総統の中に神から遣わされた者の証としての神性を描き出そうとする傾向は、ヒトラー像形成の初期から見られ、その傾向は戦時期に「最高司令官としての総統」像の中でエスカレートしていく。

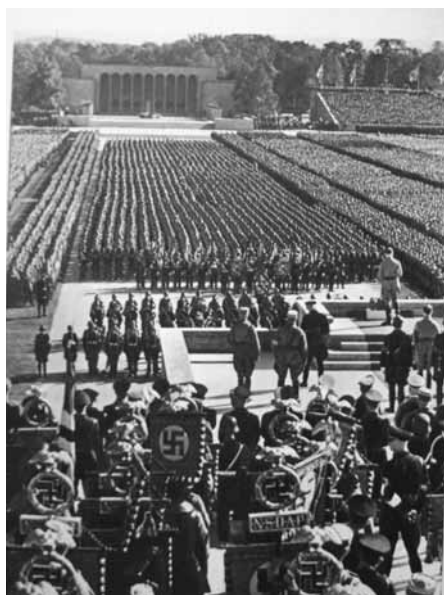


図10 第5年度8号（1936年10月号）
記事「名誉の党大会」に添えられた写真

図11（下）第6年度3号（1937年8月号）
党大会記事「SAの課題と業績」に添えられた写真
「ルイトポルト・スタジアムにおける点呼」



図12 党大会記事「これが私たちのSAである」
「一年で最高の日！毎年党大会は、最高の指導者アドルフ・ヒトラーの前をSAが行進する時に最高潮に達する」 第7年度6号（1938年9月号）



(3) 国民から愛され慕われる総統

「解放者・救世主としての総統」像では、解放する者としてのヒトラーと解放される者としてのドイツ国民、とりわけ保護すべき存在の象徴である女性の写真が対比的に並べられていたように、先の「傑出した指導者」像はここで見る「国民から愛され慕われる総統」像と補完関係にある。これによって、民族共同体の強い団結をアピールすることができた。

実質的な権力掌握を果たした時期の第3年度では、民族共同体への取り込みに成功した労働者階級や国家の基盤と位置づけられる農民階級に歓迎される総統の写真（図13、14）が掲載されているが、以後はこのイメージ作りに動員されるのは、もっぱら子どもたちだった。（図15～17）

無垢で偏見を持たぬ子どもたちに愛される総統の写真は、総統自身にも罪がなく、神に愛される存在であることを表象している。その一方で、ヒトラーは、国民一丸となって進める犠牲的努力はすべて子どもの未来の幸せのためだと繰り返した。子どもは、来るべきドイツ国家そのものを象徴した。総統は、未来のドイツが歓迎する指導者なのである。さらに、ヒトラーは『ナチ女性展望』の読者に向かっては、ドイツ民族の存続のために子どもを産み育てることこそ女性を高貴な存在にすると強調した。子どもたちから慕われ、また子どもを愛する総統の姿は、人口増加へのアピールとなり、子どもを産んで国家に贈った女性たちに対する称賛を意味した。

こうした国民の側からの敬愛と信頼に応答するかたちで、総統の側からも適宜、国民に向けた感動的な信条告白が掲載され、総統とドイツ国民との一体性が演出された。（図18）



図13 「総統と労働者は言葉を交わさずとも互に理解する」



図14 第3年度23号（1935年5月号）



図15 (上)「一つの友情が生まれる」
(右)「『ヒトラーおじさん』以外だれも体験できない」
(図13、15：第3年度21号(1935年4月号)「私たちは総統を歓迎する」より)



図16
詩「総統と子どもたち」に
添えられた複数の写真より
第6年度13号
(1938年1月号)



図17 「私たちの総統」
第8年度12号(1939年12月号)
「かつて、どの時代、どの国民の間で
一人の指導者がこれほどまでにその国民に愛されただろうか。今日私たちの
間で起きているように、これほどまでに盲目的に総統を信頼した国民がかつてあっただろうか。」
(ヘルマン・ゲーリング)

図18 「神がこの世で私に与えてくれた最高のものとは、私の国民である。そこに私の信念はある。意志の力をもって国民に仕え、私の生涯を捧げる。総統として、この国民に仕えることほど素晴らしく誇りに思える仕事は、この世にないと考える。世界を私にくれると言われても、私はこの国民の中の貧しい市民でありたい。 アドルフ・ヒトラー」第6年度15号（1938年1月号）

（4）芸術・文化の擁護者

ヒトラーが美術学校を目指したことや、ウィーンでの貧困時代、絵葉書作家として生計を立てたことは、総統の生涯をつづる記事で紹介されている。美術に一方ならぬ関心を持つヒトラーは、すでに触れたように、国民社会主義が理想とする美術作品を集めた「大ドイツ美術展」を企画し、この展覧会は敗戦の前年まで戦時中も開催され続けた。ヒトラーは国民社会主義の成果を後世に伝える巨大建築物の建設にも情熱を傾け、国民が本物の音楽に触れられるよう、世界中の都市で演奏活動を展開する国民社会主義国立シンフォニー・オーケストラに国内の小都市や僻地でも演奏会を開かせている。こうしたドイツ芸術・文化のレベル・アップへの欲求と実践は、存在の永遠性を刻印しようとするヒトラーの野心の現れである。「ドイツ芸術の日」の特集号（第8年度3号(1939年8月第1号)）に掲載された彼の言葉にそれを読み取ることができる。



第6年度3号（1937年8月号）
「自作作品の中の総統」ヒトラーの水彩画

人間生活の装飾であるピラミッドや神殿がなければ、エジプト人は何者たりえるだろうか。アテネやアクロポリスのないギリシャ人は何者たりえるだろう。建築物を持たぬローマはどうか、大聖堂や居城がなかったら私たちゲルマン人の皇帝一族はどうであろうか。市庁舎、ツンフト会館がなければ中世はどうであろう。教会や大聖堂がなければ、たとえば宗教はどうか。マヤ民族のいくつかの都市の巨大な廃墟が繰り返し新たな注目を呼び起こし、研究熱心な人間の関心を引き、虜にすることに現代人は驚

くが、それがなければ、かつてその伝説的民族が存在したことを私たちは知るよしもないだろうし、あるいは重要でもないと感じるだろう。いや、どんな民族よりも、その文化の記録の方が長く生き続けるのである。

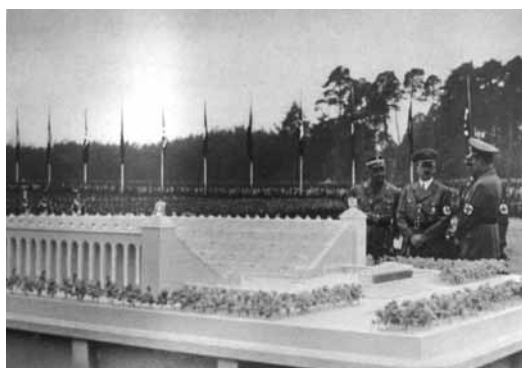


図19 第7年度21号（1939年4月第2号）

「なぜなら、あなたこそがドイツだからです！」
より

（左上）「芸術の保護者、後援者、そして厳格な批評家。総統はミュンヘンの美術館に送られてきた作品をチェックする」

（右上）「総統はドイツ国民に新たな芸術の場を贈ってくれた。そこで国民は再び本物の芸術を体験し、道徳の力を得ることができる。ザールプファルツ大管区劇場のこけら落とし」

（右下）「技術時代はエンジンに最大の価値が置かれた。比類ないドイツの機械化はすべて総統独自の仕事である。成果を収めたドイツのレース・カーを入念に観察する総統」

（左下）「至る所に建設される私たちの時代の精神と力を伝える雄大な建造物は、総統の意志と、彼の建築家としての天才的な造形力から生まれる。40万人を収容するニュルンベルクのドイツ・スタジアム」

こうして、ドイツ芸術・文化の興隆に邁進する総統の姿から、自らも美術、音楽、建築の才能に溢れ、文化の最先端に関心をもち、それを国民のために生かしてくれる「芸術・文化の擁護者」としてのイメージが作り出されていく。（図19）

(5) 最高司令官としての総統

これまで見てきた「解放者・救世主としての総統」像と「傑出した指導者」像は、戦争が勃発すると、ここで取り上げる「最高司令官としての総統」像に集約される。しかし、図1のヒトラー像の分布図を見ての通り、ヒトラー熱が最も高まるのは第6年度と第7年度、つまり1937年7月から1939年6月にかけての期間であり、開戦と共に、熱烈気分は一気に冷え込むことが分かる。ようやく手に入れた豊かな生活から一転、厳しい節約の生活を強いられ、戦争への不安が高まったからである。それゆえ、戦争初期には国民に理解と我慢、民族共同体のための犠牲的精神を訴えるヒトラーの言葉の掲載数が増えている。開戦間もない「電撃戦」の華々しい戦果は『ナチ女性展望』でも伝えられ、第9年度に掲載数が増加する。しかし、第6年度、7年度はもちろんのこと、第3年度、4年度とも較べようもない。

この時期の『ナチ女性展望』の使命は、前線に赴く男性に代わり、女性を工場労働に動員すること、それによる子育てや家事の援助体制の確立、農村女性を支える奉仕活動の展開に加え、厳しい配給制度の導入により、食糧切符や衣料切符の使い方、日常生活全般における節約の仕方など、戦時統制で紙面の節約を迫られる中、戦争遂行にあたって銃後の貢献という現実的な問題と取り組むことだった。⁽¹⁵⁾こうした現実から、紙面で「ヒトラーに会う」ことが稀になったことは、ヒトラー像が放つ効果も減少したと理解してよいだろう。実際、国民の生活の質は極端に落ちる一方、戦時活動に動員され、さらに肉親の生死の不安に苛まれる毎日を過ごすことで精一杯となっていたのである。

「最高司令官としての総統」像がヒトラーのカリスマ性を強調し始めるも、戦争の日々で懐疑心を抱き始めた国民を意識した宣伝省のプロパガンダ戦略だったと考えられる。

1938年に国防軍最高指揮権者となったヒトラーは、1939年10月にポーランドを制圧すると、1940年にまずデンマークとノルウェーを占領し、5月には前線指揮所に入り、ベネルクス三国とフランス侵攻の指揮を執った。これ以降、大半を総統大本営とよばれる各地の前線指揮所で過ごしている。この自らの姿勢についてヒトラーは次の様に語っている。

国民社会主義者であり兵士としての私は、生涯において常に私の国民の権利を平時において確かなものにし、また必要とあらば、闘ってでも手に入れるという原則を掲げた。国民の指導者として、帝国宰相として、そしてドイツ国防軍の最高司令官とし



第8年度20号（1940年4月第2号）「国民の指導者、帝国の首相そしてドイツ国防軍の最高司令官アドルフ・ヒトラー」

て、それゆえ私はただ一つの課題のためにのみ生きている。すなわち、昼も夜も勝利を考え、そのために格闘し働きそして闘い、今こそ数百年にわたるドイツの将来が決せられると認識すれば、私の全生命を厭うつつもりはない。フランスとイギリスの資本主義権力者たちによってドイツが強いられたこの戦争は、ドイツ史の中で最も輝かしい勝利になるに違いない。(「1940年3月10日の総統」第8年度20号(1940年4月第2号))

第9年度20号(1941年4月第2号)「自らの国民の第一の兵士」より4枚の写真

この時期は連合国を圧倒する勝利を重ねていた。最高司令官としてのヒトラーと共に写るのは、もはや子どもたちではなくなったが、兵士たちや看護師たちとのまだどちらかといえば余裕ある雰囲気漂う。



フランス侵攻がドイツの圧倒的勝利で終結し、1940年6月22日、第一次世界大戦終結時の休戦協定調印式が行われた因縁のコンピエーニュの森でヒトラーはフランスとの休戦協定を結ぶ。その後、パリを視察する総統と兵士たちの写真「パリ、モンマルトルの総統」が第9年度20号(1941年4月の誕生日号)に掲載されるが、そのキャプションには「これまで同様、この戦争は神の摂理により祝福されたのであり、将来においても祝福されると、確信する」という総統の言葉がある。奇跡的な国防軍の連勝をこの言葉は、「神の摂理」と解釈している。この言葉は「熱狂的期待感をもち私は未来を見る」という文が補足されて、独ソ戦の直前号にも再掲されている。(第9年度24号(1941年6月第2号))

ここには、神の恩寵に支えられ、最高司令官として自らが指揮するかぎり、敗北は考

えられないという英雄的自信が溢れている。

勝利を重ねる間は、戦時下の忍耐を強いられる国民も、総統のカリスマ性を信じ、頼りにしていただろう。しかし、1942年6月に独ソ戦が始まり、その冬が到来すると、戦況にかげりが見え始め、翌年の1943年1月のスターリングラード戦の敗北は、ドイツの敗戦を決定づけた。『ナチ女性展望』は宣伝省が提供するカリスマの総統像に呼応するように、「1942年4月20日、総統への誓い」(第10年度17号(1942年4月))で女性たちは、神が救世主として遣わしてくれたヒトラーが1933年以前の困窮の生活から夫や息子たちを救い出してくれたことを再確認し、その恩を決して忘れず「総統が命令し、私たちはあなたに従う」を誓いとしている。過去の恩を忘れません、という主張そのものが、すでに危機的状況を窺わせている。

敗戦色が濃厚になる戦争末期、「奇跡」から「受難」へと状況が急変する中でも、「神の預言者」としての立場から最高司令官である総統の言葉は発せられている。第12年度6号(1944年2月)の記事「平和への希望」冒頭に置かれた言葉が、『ナチ女性展望』に掲載された最後のヒトラーの言葉となる。

1944年という年は、全てのドイツ人に重く厳しい要求を強いるだろう。大規模な戦争の遂行が危機のこの年に迫るだろう。我々は、その要求を成功裏に乗り越えられるという確信に充ちている。

神への我々のたった一つの祈りは、我々に勝利を下さるようというものであってはならない。我々の勇気、勇敢さ、勤勉さにおいて、我々の犠牲に従って、正当に判断を下してほしいということである。我々の闘いの目的を神は知っておられる。その存在を持続させるのは、神ご自身が創造された我々民族の他にない。我々の犠牲的精神、我々の勤勉さが神に理解されぬままにはいない。我々は神に仕えるために、全てを与え全てを行うつもりでいる。神が判断を宣告できるまで、神の正義は我々を試すことになるだろう。我々の義務は、神の目にあまりにも軽いと映るのではなく、「勝利」を、すなわち生きることを意味する神の慈愛に満ちた審判を聞けるよう心を砕くことである。(1944年1月1日 アドルフ・ヒトラー)

そして、2号あとの最後となる誕生日号の表紙に、総統の上の言葉に呼応するように詩人アグネス・ミーゲルの言葉が女性たちの気持ちを代表して記載されている。(図20) この言葉が、現実の女性たちの心情をどれほど反映しているかは分からないが、ナチ指導部が最も恐れていたのが、第一次世界大戦で起こった銃後の崩壊だったことを考えれば、この言葉通り、第二次世界大戦において銃後は最後まで崩れなかったのである。



図20

第12年度8号（1944年4月）

「総統、私たちをあなたの手に委ね、はっきりと宣言させてください。あなたと私たちは、決して離れることなく、私たちのドイツに責任を負うということ。」（アグネス・ミーゲル）

おわりに

アドルフ・ヒトラーとは本当は何者であったのか、それを知ろうとすることに意味はないだろう。物事を見て記憶する時、私たちはその実体を把握しているわけではなく、与えられるイメージで対象を捉えている。イメージは多様であるから、記憶がひとと異なることはしばしばある。それゆえ、いわゆるイメージ作りされた像を与えられれば、そのイ

メージが本当にその本来の性質を持っていようが、見せかけであろうが、受け手はそのイメージに影響を受け、イメージ作りをした人に左右されることになる。したがって、ヒトラーは敵国では悪の権化として嫌悪され、ドイツ国民の間では、解放者・救世主として崇拜されることになる。

本論では当時の官製女性雑誌を例に取り、ドイツ人女性にヒトラー像、すなわち「解放者・救世主としての総統」、「傑出した指導者」、「国民から愛され慕われる総統」、「芸術・文化の擁護者」、「最高司令官としての総統」としてのイメージがどのように伝えられたかを見てきた。どれも当時のプロパガンダが作り出したヒトラー像である。しかし、国民社会主義のプロパガンダがこれほどまでに成功し得たのは、創出されたイメージが国民の中にある期待と合致したからに他ならない。

傑出した指導者ヒトラーとそれに熱狂的に帰依する大衆という関係性は、歴史研究者の間ではマックス・ヴェーバーの「カリスマ的支配」の一例と見なされている。ヒトラーは天才的政治手腕を振るい、大量の失業者の解消、ヴェルサイユ条約の克服、そして内政の安定を短期間で実現し、信徒者であるドイツ国民に幸福をもたらすことによって、指導者としてのカリスマ的能力を実証した。そのことは、ここでは「解放者・救世主としての総統」、「傑出した指導者」像の中に明瞭に現れており、一方、国民が指導者の資質に絶大なる信頼を置き、帰依するようになるプロセスは、次第に増加する「国民から愛され慕われる総統」像の掲載数と軌を一にしている。両者の蜜月は1938年から1939年の第二次世

界大戦勃発までの期間に最高潮に達した。

しかし、開戦と同時に、ヒトラー崇拜熱は冷や水を掛けられたように引いていく。ヒトラー人気は、総統が開始した戦争に対する不信感にもかかわらず、フランスに対する電撃戦の戦果の後に再び頂点に達するとの分析もあるが、『ナチ女性展望』を見る限り、若干の注意を引いてはいるものの、到底戦前の状態に戻ることはできなかった。

独ソ戦で露わになったカリスマ的支配者の失敗は、追従集団の急速な解体につながる恐れがあった。しかし、1944年7月のヒトラー暗殺未遂事件にもかかわらず、解体はついに起こらなかった。それは、「1942年4月20日、総統への誓い」(第10年度17号(1942年4月))に記載されていたように、第一次世界大戦後の困窮の生活から奇跡のように国民を救い出し、豊かな生活を可能にしてくれた戦前の総統への想いが、戦中の厳しい苦悩を前にしても勝ったからだろうか。ヒトラーの実体が何であれ、そしてヒトラー像がプロパガンダの産物であっても、期待と信頼を持ってそのイメージを受け入れた当時のドイツ国民にとっては、それが現実の総統だったのであり、この関係性は歴史的事実として受け止めねばならない。

(本論は、平成24年度～26年度、日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C)「第二次世界大戦下の大衆メディアにおけるジェンダー・民族表象の国際比較」(研究代表者、杉村使乃)の研究の一部である。)

註

- (1) アルヴィン・H・ローゼンフェルド(金井和子訳)『イメージの中のヒトラー』未来社、2000年、42～46頁参照。
- (2) 西城信訳『ゲッベルスの日記』番町書房、1974年、40頁。
- (3) 同上、46頁。
- (4) 同上、68頁。
- (5) 同上、86～88頁。
- (6) 通常、表紙には発行年月が記載されている。創刊年度から12年目の第12年度7号にはまだ「1944年3月」とあるが、8号以降は西暦のみで月の表示はない。ただ、記事を読めば、何月号であるかは分かる。月の表示がなくなったため、最終号である第13年度4号表紙には、「1944/45年」と記載されている。前号の3号は「1944年」とだけ記載されているが、記事からクリスマス号であることが分かる。最終号は年越しを意識して、そうした表記になったと考えられる。
- (7) ノルベルト・フライ/ヨハネス・シュミッツ(五十嵐智友訳)『ヒトラー独裁下のジャーナリストたち』(朝日選書560)、1996年、108頁および110頁参照。
- (8) 『ナチ女性展望』の解題および全目次については、桑原ヒサ子「資料『ナチ女性展望』全目次」、上野千鶴子・加納実紀代・神田より子・桑原ヒサ子・松崎洋子『軍事主義とジェン

ダー』インパクト出版会、2008年、i~xlv頁参照。

- (9) 1938年当時の日常生活の豊かさを示す事例については、Kasberger, Erich: *Heldinnen waren wir keine. Frauenalltag in der NS-Zeit*, München, 2001, S.25-26.
- (10) 1933年6月の「失業減少法」に組み込まれた「結婚資金貸付制度」は、男性工場労働者の月収の4～5倍の最大限1000マルクを無利子で貸し付ける制度だった。経済的に苦しい若い夫婦が新婚生活を始めるための調度等を揃えるためであったが、受給条件は妻の退職だった。また、子どもを1人産む毎に四分の一の額の返済が免除されたので、4人子どもを産めば、返済義務はなくなった。したがって、この制度は、経済政策、労働市場政策、人口政策的意味を持っていた。
- (11) クローディア・クーンズ『父の国の母たち』(上) 時事通信社、1990年、235～236頁。
- (12) ナチ指導部とナチ女性団の活動との関係については、桑原ヒサ子「ナチ女性の社会活動における戦略としての母性—ナチ・イデオロギーと女性の地位向上のはざまで—」、『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』No.9、2011年、37～70頁参照。
- (13) 投票用紙の党名リストの「1」が国民社会主義ドイツ労働者党であった。
- (14) 『ゲッベルスの日記』275頁。
- (15) ドイツ人女性の戦時活動については、桑原ヒサ子「銃後から前線まで—『ナチ女性展望』に見る戦時活動」、『軍事主義とジェンダー』(註(8)) 45～73頁、また戦時下の日常生活については、桑原ヒサ子「女性雑誌『ナチ女性展望』に掲載されたファッションと料理のページから再構成する第二次世界大戦下の暮らし」、『敬和学園大学研究紀要』No.21、2012年、145～168頁参照。